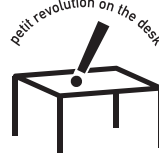


Vol.29

## 机の上の小さな変革



## 好奇心の醸成

自宅でのテレワークもすっかり定着し、日々の仕事の仕方にも多様性が生まれていると思うのですが、今回はみなさんが普段仕事をする際に使っているカップと飲み物の関係について考えてみたいと思います。

自宅にいらっしゃる場合は話が早いと思うのですが、いま飲んでいる飲み物を、いつものカップ・コップ・湯呑みではなく、まったく別の器や皿で飲んでみてください。特に、平べったいお皿やお米を食べるときに使っているお茶碗など、普段飲み物に使っていない器で飲んでみていただきたいです。

◇ ◇ ◇

いかがですか？ いまみなさんには、普段と違う道具で強引に飲むことで、違和感を感じてもらいました。この違和感がどのような要因で生まれたかについて、もう少し細かくいっしょに見ていきましょう。

飲む器を変えると、まず口と器が接する部分の幅がいつもより狭まったり広がったりと変わります。その接点の幅に合わせて、口に対して飲み物が触れたり入ったりする量も変わります。これによって、通常器から飲むときに事前に予測していない量の飲み物が口に触れたり入ったりすることに、私たちは違和感を感じています。

また、器自体の形が普段とはまったく違うので、持ち方や飲む速度、姿勢が変わります。これまで気軽に口に

運んでいたものを、器を変えることによって慎重に飲むようになったり、少しずつ飲んでいたものを一気に口に入れたりするようになるなど、飲む体験自体が大きく変化することにも違和感を感じているはずです。

## —— “当たり前” のアップデートを ——

今回みなさんに「飲み物と器のこれまでにない新しい組み合わせ」を強引に試していただいたことで、新しい違和感を生み出しました。その結果、おそらくみなさんの心に「それでは別の組み合わせだと、どんな気持ちになるのだろうか」と、様々な飲み物と器の組み合わせを試してみたいような好奇心が湧き上がってきたのではないかと思います。

一見突拍子もない体験に取り組んでみるのが私たちの“当たり前”のタガを外し、好奇心の赴くまま、時間を忘れて、非常に繊細な感覚を探っていく作業へと誘ってくれます。その没頭の結果、これまでの常識からは違和感のある組み合わせであっても、実はちょうどよかったり、元の組み合わせ以上に美味しく飲めるような組み合わせが見つかったりすることもあります。

いま私たちが当たり前だと思っている組み合わせは、唯一絶対の正解ではありません。身の回りのあらゆることは常にアップデートが可能で、あなた自身の力で変えることもできるのです。



## PROFILE 菅 俊一 (SYUNICHI SUGE)

コグニティブ・デザイナー。表現研究者。映像作家。多摩美術大学美術学部統合デザイン学科専任講師。1980年東京都生まれ。人間の知覚能力に基づく新しい表現を研究・開発し、様々なメディアを用いて社会に提案している。主な仕事・著書に、NHK Eテレ『2355/0655』、『観察の練習』『ヘンテコノミクス』など。